1939年の伯林日本古美術展覧会と東洋美術協会
(Gesellschaft für ostasiatische Kunst)
－伯林日本古美術展覧会の背景についての一考察－

安　松　みゆき
(別府大学文学部助教授)

本発表は，第二次世界大戦間際にドイツのベルリンにおいてこれまでにない規模で開催された日本古美術展覧会に着目することで，近代における日独美術交流史の一端を明らかにする試みのひとつであるが，特に展覧会の開催経緯の背景を，当時のベルリンを活動拠点としていた東洋美術協会（Gesellschaft für ostasiatische kunst）での日本美術の研究動向を通して考察するものである。

東洋美術協会は，当時にはドイツに限らず，欧州のなかでも規模の大きな東洋美術および東洋文化の学術組織であったが，まだ日本ではその存在がほとんど知られていない。東洋美術協会は1927年に設立され，日本や中国等の美術や文化に関する講演や，展覧会等を積極的に開催した。その活動の記録は，学会設立より15年以上も前から発行されていたが，学会設立にともなって学会機関誌となった『東洋雑誌 Ostasiatische Zeitschrift』にまとめられている。本発表では東洋美術協会の活動として，その『東洋雑誌』に掲載された日本美術に関する研究発表や論文について検討した。その結果，そこには１９世紀以来西洋において注目されてきた浮世絵や工芸をとりあげる傾向が連綿とみられる一方で，新たに日本美術における純粋美術をテーマとする研究も散見された。さらに，日本美術研究者であり，のちに日本古美術展の事実上の主催者となったプロイセン国立美術館群総長のキュンメル自身の研究成果にも同様の傾向が認められた。そのような傾向は日本美術の総合的な学術探求を背景にした可能性が推察され，またキュンメルの場合には，それに加えて長年の夢であった純粋なる古美術を一堂に出陣する日本古美術展開催のための基盤形成の可能性として示唆することができた。